

## 【執筆者の横顔】

仁子さんは、昭和十四年、満州国吉林市で生まれ、同二十年八月、東安省鶏寧県で終戦に遇った。日本敗戦のみじめさ、特にソ満国境地だったのでその惨状を子供心で悲しんだ。

官吏であった父親は、日本軍に協力のため一人鶏寧に残留したので、母親と子供二人は鶏寧から南下し、奉天（瀋陽）に避難した。

その間、ソ連軍からの爆撃、飲まず食わずの日もあり、現地人の暴動にあらなど生きた心地ではなかった。神仏の助けか三か月後に奇しくも奉天で父親とめぐり会えた。夢かと驚き、感激し、あんどした。親子四人はここ奉天で越冬し、翌二十一年四月、仁子さんは、奉天市青葉小学校に入学した。そして同年七月、コロ島から運よく日本に引き揚げる事が出来た。

神奈川県相模原市で五年間を過ごしたが、やがて父親は故郷山形県に戻り、山形県議、村山市長に就任した。その間仁子さんは、小学校を五校も転々と移動せねばならなかった。父親がある時、中学校の運動会に

行ってみると、グラウンドの中央の指揮台に立ち応援团长として大勢の生徒を指揮しているのがなんと仁子であった。いや子供は案外たくましいものだと思つて語ってくれたことがあった。高校から東京家政大学を卒業し、千代田生命本社勤務となった。

今、五十四歳の明朗活達な主婦、三人の子女を成人させたこのごろ、自宅で学習塾を開き、又は健康スポーツのリーダーとしても、幅広く楽しんでゐる。なかなか親切で世話好きな性格の彼女は地区の人々からとても慕われているのはうれしき限りである。

（元拓務省囑託）

満州開拓担当 岡本 雅生

## 終戦の確認

東京都 阿久津 英雄

午後の陽射しを浴びながらだらだら坂を背たけほどの青葉をかきわけて前進すると、突然青葉の間から水

面が見えて来た。用心深く進むと荷車が通れるほどの道に出た。大部隊が通って行ったのか道路の両側の草が踏みたおされている。湖にそって道路が走っていたのでよく水面を見ることが出来た。あふれるばかりの満々たる水に夕焼けが反射していた。地図には鏡泊湖と書いてある。明るい内に寝る場所を確保するために高くのびた落葉樹の中に入った時はうす暗く、奥に入るにしたがい暗さをました。熊が折った木の肌が白く暗さの中にはっきりと見えた。みんなを振り返ってここに寝るから薪を集めるよう指示した。

毎日寝場所を決めるのに苦勞するが、今日は白い木の肌が宿屋の看板にも見えたのですぐ決められた。高い木の枝が幾重にも重なっているので少々の雨なら防いでくれるだろう。三か所に焚火をしてその回りで寝ることにした。大陸気候は昼と夜の温度差が甚だしいので火を消すことは出来ない。

火は勢いよく燃えて、四方を明るくした。焚火をかこんだ兵隊たちはすぐ眠ってしまった。故郷の夢でも見ているのだろうか、時々寝返りをする。平和な寝顔

を見た時には元気で親元に返してやらねばと心に決めた。眠れず横になったが頭がさえてくる。今日までの行動が頭の中を横切って行く。物音もなく焚火の音と高いところの枝葉をうすく照らしているばかり。寝ようとして目をつぶると思ひ出される。

命令で切込隊として兵隊と共に部隊を離れたのが八月十四日夜遅くだった。それから毎日の切込み戦闘と野宿と空腹で疲れ切っていた。帰る部隊は捕虜となって牡丹江方面につれて行かれたと聞いた。これから先どうすべきか考えながら眠ってしまった。

何時間眠ったか。ビシャーと冷たい手で殴られた痛みと音で飛び起きた。四方は暗く焚火だけが赤々と燃えていた。顔に手を当てて見ると濡れている。雨かと思上げると葉と葉の間から夜明けの空が見えた。兵隊たちは良く眠っているが寒いのだろう。幾人も焚火の方に寝返りをしている。私も背中が痛いほど寒いので背中を火にむけて寝返りをする。遠く木の間から東の空が赤くなっているのが見えた。夜明けと共にソ連軍は動き出すのだが起こすには早い、少しでも長く

寝かせてやろう。それにしても関東軍はどうなっているのか。ある部隊は朝鮮を目指して南下している。

我々は新京を目指し磁石をたよりに西へ西へと山を越え、河を渡り進んで来たが、不安になってきて情報を聞きたくないので、友軍に接触すべく山を下りた。まもなく農道に出た。用心深く進んでいるとき兵隊が立ち止まり前方を指差しながら「部落が有ります入口の所で多くの人が動いています」と報告しながら走って来た。全員を座らせ確認出来る所まで行き良く見ると友軍だったので、兵隊たちを呼び一緒に部落に入っていくと小さな町のような家の並びだった。前方から友軍が帰って来るので聞いてみると、前方に強力な敵がいて前進出来ないで帰って来たと話した。弾薬、食糧を持って匪賊になると中隊ぐるみ山の中に入ってしまった。「これからどうすれば良いのか。」はきすてるように大声で言って立ち去っていった。

私たちも途方にくれて一軒の家の中に入って腰を下ろした。しばらくして五人ほど入って来て私を見つけ「おい元気だったか。」近づいて来た。良く見ると同

職場の飯岡君だった。二人は声も出さず抱き合って無事を喜んだ。お互いに今までのことを簡単に話し合ってから一緒に行動することにした。私より満州のことを知っているのではっとした。まず食料をさがすため横道に入り一列になり進んだ。ア리가甘い物を捜すように動物の勘が働き、すぐ見付けられるようになった。

小高い丘を越えた所に馬鈴薯畑があったので近づいて行くと、道路側に立て札があり、見て驚いた。「日本敗残兵に告ぐ、日本は戦争に敗けました。早く武装解除を受けなさい。」同文で十本ほど立っている。「これは謀略だ、部隊長を呼んでこい」全員がいきり立っていた時、一人の兵隊が言った「私が町行って調べて来ますから行かせて下さい。」「危険だから駄目だ」と止めたが「私は朝鮮語が出来るから大丈夫です」自信にみちていたので許可した。

兵隊は二時間ほど帰って来た。道端の草の上に腰を下ろしている所に来て、申し訳なきそうに小声で「本当でした。町名は名月構という小さな町でその小学校に全員収容されております。」との報告に声も出

ない、涙も出ない、ただ小刻みに体が震えて来た。敗けた以上私一人の考えで行動出来ないのだから全員一致で武装解除を受けることになり、明月構に向かったが胸の中は複雑だった。

小学校はすぐ分かった。兵器を渡し名前と階級を書かされ講堂に入るよう指示された。広い講堂も満員だったので一段高い舞台の下に陣取った。落ち着いてから回りをみると全員丸坊主に驚き、女性は顔が黒いので聞いてみた。ソ連兵から身を守るためだと話してくれた。

共に優秀な関東軍を信じ頑張ってきたのにと思うと腹が立つと共に、この日本人をも守れなかった私たちにも責任があるさびしさを感じた。その反面兵隊をつけて一か月間全員無事に終戦まで来られたものだと、ほっとした気持ちで全員の顔を見ることが出来た。しかし武装解除の屈辱は一生忘れることは出来ないと思っただ。

夜は裸電球の暗さの中で横になったが眠れない。屋根の下で眠るのだから眠れても良いはずなのに駄目で

ある。一か月間の野宿生活が身に付いてしまったのか、落ち着かない。突然入口の方で「キャー、助けて」と女性の声があったので身構えたが銃が無いのに気が付いた。昼間聞いた事が現実となって来たが、自動小銃を持った奴にはどうすることも出来ない。中年の女性が二人の兵隊に引きずられて我々の前を通過して舞台上に上げられ一人は自動小銃で警戒をし、一人が女性に迫っていたが女性の泣き声は無かったすでに失神したのである。手を強く握りしめて互いに顔を見合わせているがなすすべがない。二人は帰って行ったが、女性は起きてこなかった。

三日目の夜、女を出せと言って来た。女性たちは小さくなって、ある者は子供を抱きかかえて身を守ろうとしている。突然中年の女性が立ち上り皆さん心配しないで下さい。私が相手になりますからと寂しさの中にも笑みを浮かべてソ連兵と共に舞台上がって行った。しばらくして何にも無かったように元の所にもどって来た。「ありがとう」とどこからともなく聞こえて来た。日本人の中にも勇敢な女性がいると感謝す

ると共にはつとした。後から富錦で芸者をされていたと聞き、唐人お吉を連想した。外部との接触は自由だったので社宅に残っている人との話し合いは出来た。

武装解除から一週間目、軍人は一般の人より早くウラジオストックより日本に帰すと話が伝わって来た。

私たちは本気にしなかった。条約さえ守れない奴の話なんか信じられないからだ。しかし話があった以上はみんなと相談すべく集まってもらった。そこで友人と共に妻や子を捜すために残らねばならぬ事情を話し、みんなの意見を聞いた。全員が悪いですが一足先に帰らせてもらいますとの返事だった。

私たちは今後の行動を話し合った。一番に学校から逃げることに、二番は隠れる場所と協力者を探すこと、服装と汽車がどうなっているか調べることにしてその日は暮れた。次の朝早く学校を出るとすぐ道路があった。そこを横切ると満鉄社宅につきあたると。目的の家は道路に面しているので一分もかからず家の中に入るこゝとが出来た。名前を忘れてしまったが前に一度来て話をしたので私たちが満拓の人であることを知っていた

ので気持ち良く迎えてくれました。

奥さんも入隊したご主人の事が心配なんでしょう、戦争のことを良く聞かれた「どうして一か月も終戦を知らなかったんですか。」と不思議そうに言った。だが考えても優秀なる関東軍の命令系統が無くなるはずもないから無理もない。だが現実はいどいものだった。「戦車と小銃では戦争にならないから山の中に入る。命令系統が無いから同志討ちをする。こんな状態では終戦を知ることが出来なかった。だからご主人も知らずにいるんですよ。」と話をするとほっとする様子が見えた。

それから我々の目的を口早に話した「佳木斯まで奥さんを探しに行くのは大変ですね。でも佳木斯にはいらっしやらないでしょう。どこかに移動しているのではないですか」と民間人の避難民の話をしてくれたので次の行動を考えた。必ず地方事務所は本社に集結するのであろうから、新京の本社に行けば状況が分かる。それから又行動に移ればよい。汽車で新京に行くことにして学校に帰って見ると近く移動するとの話があっ

たので明晩決行することを心にきめた。当日午後皆に別れを告げたら、私たちは一足を先に帰りますから必ず奥さんが見付かるように祈ってまずと手を握りしめた。寝しずまっから一か月間生死を共にした戦友と別れて表に出た。時々銃声が聞こえるが星明かりの静かな夜だった。

社宅に着くと奥の部屋に寝かせてもらい明朝食事を終えてから、日中は危険だから屋根裏に入っていた方がよい。押入の天井から入れると言われた通り天井裏に入ってみると暗く板のふし穴からさし込む光はサーチライトの光にも似ていた。二人共大きいので天井が持ちこたえられないか心配だ。目は段々となれて近くの物は見えて来た。昼食は、おにぎりを出してくれた。食べてしまうと安心感と気の緩みと暗いので眠ってしまい、軒をかく度の下からトントンとつつつかれ、目をさます。今度は寝まいと思いつつ又下からトントン同じ事を繰り返して二日目の昼ごろ、兵隊さん学校の男たちは全員出て行きましたから下りなさいよ。この言葉聞いた時はうれしくほっとした。

押入から出た途端光が目にしみた。しばらく休んでから駅の警備状況と時刻表を見ることで話し合っているとき「軍服では外に出られないでしょう。すぐ捕まってしまうわよ。主人のだけど着てみますか」と二着出してくれたので着てみると少し小さいが、なんとなく民間人らしく見えた。「私はこれで駅に行つて来ますから」と外に出た後から声が聞こえて来たので止まると「駅長は日本人だから良く相談すると良いですよ」私たちは頭を下げて駅に急いだ。途中数回銃声があったがまもなく駅についた。

明月溝の駅は木造の平屋で小さな駅だった。駅長室に入って新京行のことを話してから日本円で切符が買えるかどうかをたずねたが駅長は真剣な顔で「切符は売りますが止めなさいよ。今まで行った人たちで目的地に着いた人はいない。途中汽車から落とされると聞いているので勧めることが出来ないんです」申し訳なさそうに話をするのだが私たちが、聞かないので「明朝八時に来て下さい。」責任持たせませんよといった顔で椅子に座ってしまった。

私たちは弓から離れた矢と同じで後にはさがれない、前進あるのみ、生命の危険よりも妻を捜せる喜びの方が大きかった。朝、千人針から妻が縫い込んでくれた汗の臭いのする十円紙幣三枚を取り出し、社宅に皆さんに厚くお礼を述べ駅に向かった。駅の中には乗客が少なかつた。新京行の切符を手にして中国人の視線のがれて待合室の外のコンクリートの上に腰を下ろした。九時に来る汽車が十一時になつても来ない。心配になり立ち上がった時、公安局員がソ連兵をつれて来て私たちを指差してヤボンスキー（日本兵）と叫んでいたが、背広と帽子だから一般人と思つたのかすぐ駅の中に入つて行つた。ホームの端に便所と書いた木札が目に入った。あそこにかくれようと言いながら走つた。

便所の中に一人ずつ飛び込んだ。すき間だらけなので臭いは無かつた。四時ごろになつて汽車の音が聞こえて来た。「おい、来たぞ」便所から出て線路を横切り汽車に近づいた時は、中国人が我先にと乗車していたので私たちには気が付かなかつた。一緒になつて車内

に入り椅子に腰を下ろした時中国人に足蹴にされたので立ち上がり洗面所に隠れた。まもなく発車し二駅を通過したが何にも無かつた。しかし駅長の言葉通りいつかは来るであらうと度胸をきめて対策を考えていたとき、速度が遅くなつて来たので停車するのを感じ窓越しに駅名を探した。二回目に見えたのが敦化であつた。

停車し外を見ると電電公社の旗を持った家族の避難民の大集団が隣の車に乗つて来たので、私たちもその中にもぐり込んだ。責任者に一緒に行つて行つてもらいたいとお願ひしたが、ソ連の許可書での避難だから駄目だと言われた。我々にとつては命にかかわることだけにそのまま車中に居座つたが、それ以上何にも言つてこなかつた。暗くなつてから吉林駅に着いた。

ソ連兵の案内で駅内小荷物預かり所に入れられた。台を境にして二百人以上の中国人が団体の荷物をねらつて集まつて来たが、ソ連兵がいるので入つてはこない。夜中兵隊が来て、団体の一人ずつ手まねで時計、万年筆は無いかと聞いていた。私の所に来て同じ事をした

ので「ニィット」と手を広げて見せると行ってしまった。

翌朝新京行きの列車が入って来て乗車の連絡があったが荷物が多く重いのでなかなか早く進めない。中国人は荷物をねらって近づいて来る。私たちは何もないので出来るだけ荷物を持つのだが、数が多くてこれ以上持てない。段々遅れる人が出て荷物を取られ始めた。早く早くと呼ぶのだが遅れる。荷物を取られまいと必死になっている。私は立ち止まって「荷物を捨てなさい。すぐ来なさい」と声をかけると、あきらめきれずに振り返っている。「奥さん荷物より命の方が大事でしょう。あれ以上いると棒でたたき殺されてしまいますよ。あきらめなさい。」女性は歩きながら頭を下げた。

列車の中に入ってほっとした。結局荷物を取られた人はこの人だけだった。列車が無事新京駅に着いたのが昼すこし過ぎていた。電電公社の団体と別れて町に入って驚いた。まるで別世界に来たような平和そのものだった。銃声も無く略奪もない昨日の吉林の光景は

何だったのか、命をかけて戦って来たのは夢だったのか、平和な町をのんびりと歩いて満拓本社を訪ねて佳木斯の人たちの安否を聞いてみると、二日前に到着して孟家屯の社宅にいと聞かされた時には体の力がぬけて行くのがわかった。飯岡君の奥さんは、姉のいる緑園の社宅にすることも分かり安心して別れた。

孟家屯に行く途中で孟家屯、孟家屯と客引きしている馬車に乗った「ニィヤードこに行くか」敗戦ですべて逆転してしまった。腹も立ったが孟家屯と強く返事した。早く妻子と会いたいのだが、荷馬車だけに遅い。満映の前を通って目的地に着いたのが夕方だった。妻のいる社宅は一番手前の右側の二階だと教えてくれたのですぐわかった。階段を昇ってドアを開けると五人の女性が一度に私を見てあっと驚くと共に隣の部屋に「奥さん旦那さんよ」と声をかけてくれた。

妻は子供を抱いたまま出て来てぼかんとしばらく顔を見ていたが、「よかった」一言言って座ってしまった。子供を中にして抱き合った。それから子供が病気になることを話してくれた。妻は病気になる原因を



申し訳なきように話す。やつれた顔を見て苦勞の程がにじみ出ていて責める気にはなれなかった。苦しそうな息づかいなので夜が明けるのを待って安民病院に入院させた。日本人の医師は肺炎と診断したが薬が無く必要な手当てを教えてくれた。徹夜で看護すれど段々と悪くなるのが分かるがどうすることも出来ない。夜が明けて飯岡夫婦が見舞いに来てくれたので、薬の無いことを話すとは病院に勤めているから何とかなるから縁園に来ないかと言われたが、その時は連れて行ける状態ではなかった。まもなく妻と私の顔をながめて息を引き取ったが涙も出ない。子供を抱いて病院を出ると、道の両側がコスモスの花でおおわれていた。

その夜は皆で通夜をして翌日寒くないようにと皆さんがいろいろの物を入れてくれた。妻は眠っているような顔の回りに多くのコスモスの花を入れてやった。だから今でもコスモスの花を見ると寂しくなる。妻と共に子供の棺を担って社宅と孟家屯駅の中間の広野に埋め、子供の名前を書いて墓標にした。明日から生きることを考えねばならぬ。地元の人と異なって売り食

いする物は何も無い。毎日仕事を探しに出ているとソ連軍の仕事が見付かった。賃金は少なかったが野積みになっている麻袋を持って来ると値良く売れたので、五家族が生活出来た。女性は枯れ草を集めて暖房に使った。

石炭が売れると言われては、孟家屯駅近くで線路に落ちていた石炭をひろい金に換えた。ある時はソ連兵に追われる危険もあり、又汽車からスコップで投げたくれた日本人もいたと、喜んで帰って来ることもあった。軍の仕事が続いたので助かったが値の良い麻袋が凍りついてなかなか取れなくなったが賃金より良かった。ソ連兵はこわれた椅子まで運んで行くのを見て、兵器生産のみで平和産業など無かったと彼らは言った。ライターに火がつくと二メートルも飛びのいたとか、いろいろの話が笑い話として伝わって来た。射撃の腕は驚くほどうまい。日本軍の多くの指揮官が戦死したのもうなずける。

段々と良い麻袋が取れなくなると共に働きに出なくなった。別棟の人が来て「実は駅近くの倉庫の中に麻

糸が多くあるが売れないだろうか。」と相談に来た。麻袋が売れて麻糸が売れないわけがない。高く買うとの返事があった。夜を待って下見に行つて喜んだ。山のように積んであり運ぶには都合が良かった。一卷見本に持ち帰ることにしたが、六十キロの重量なので転がすことにした。丸く幅があるので良く転がった。思ったより高く売れたのでこれで杜宅全員生活することにした。もとは日本の物だから遠慮なくちょうだいしよう。それには丈夫な櫛を造ることにして、月光を利用して実行することとした。

二日後、夕方から月が出ていたので、満月ではないがその夜実行することにして夜を待った。大分暗くなったので表に出ると、すでに数組の夫婦が櫛を持って待っていた。歩き始めると後から十組が加わり長い列になった。静かにするように後方に伝達した。その夜は十二巻持ち帰った。私たちは取り返し部隊とよんで毎夜実行した。最初は静かに実行していたが段々と大部隊になるとうるさくなってくる。自動小銃で撃つて来るのは毎日だった。撃たれると座ってしまふから

部隊が止まってしまう。止まらないようにするのが大変な仕事だった。

荷物が大分多くなって来たので、荷馬車十台で取りに来るよう連絡すると、翌朝十台で来たが、公安局員が銃を持って乗っているので聞いてみると荷物の安全のためにつれて来た。心配ないと言ったが安心出来なかった。十台に荷物を満載して帰って行つた。私は売上金を持って各家を回って金を渡していた時、公安局員が来てるから帰らないようにと伝言があった。売上金を取り返しに来たなと直感したので、帰るまで隣の部屋に待っていた。帰つたとの知らせで帰ってみると妻がひどくせめられたと聞いてかわいそうな気がしたが、それでも皆さんの生きる金を取られなかったので良かったと妻と話し合った。

しばらく身を隠した方がみんなのためと思ひ、満映近くの友人の社宅に妻と共に移った。遊んでいても面白くない。友人と何か商売でもするかとたちまち意見一致し、近くに味噌工場があるから味噌を売ることにした。翌朝工場が四斗樽に詰めて緑園地区を目指し

て出発したが、途中で売り切れてしまったので、帰ることにして近道を選んだ。空になった樽をぶらぶらさせながら歩いていると後からソ連兵が来るのが見えたが走って撃たれても困るのでゆっくり歩いたからすぐ捕まった。蒙古兵らしい。自動小銃の先で樽をたたいたので中を見せたが、顔を左右にふったので金を出せと言うことらしい。友人と目で合図して売上金全部を渡すと帰って行った。社宅にて妻たちに話をしたが信じてもらえなかった。味噌屋は一日で終わってしまった。

余り友人に迷惑をかけてはと空家が有ったので引越した。孟家屯に近いのがうれしかった。新京近辺で政府軍と中共軍との戦闘が続いているので家の中を整えるのに急いだ。不足している物は明日買い出しに行くことにした。翌日台所用品を買って満映近くに来ると、砲声が聞こえて来たので野原の小道に入り近道をして帰ることにした。中ほどに来たころは遠く近くに迫撃砲からの砲弾が破裂しはじめたので、妻に走れと声をかけた。走るたびに台所用品が音を出した。今夜

は戦闘があるかもしれないので、窓には畳を立てかけて準備したが静かな夜になった。

政府軍はガソリンの取扱いを禁止していたので高く売れた。自分の家から近い住宅街にガソリンを持っていく人がいると教えてくれたので行って一斗缶八分目程のガソリンを買って、リュックに入れて背負ったが歩きにくい。二つ目の十字路を通る時左の方に公安局員の姿が見えたので横道に入って走ったが、体が前後にゆれて早く走れない。百メートルも来た時は背が止まらなくなって来た。ガソリンがもれたなと感じたが止まらぬ。夢中で家に飛び込みリュックを下ろしてみると、ガソリンは半分背中中はヒリヒリ、裸になると火傷になっているのを見て妻に「カチカチ山みたいね」と笑われた。三日ばかり休んで仕事さがしに社宅を回って情報交換をするのが日課になった。

孟家屯の社宅の昔の仲間が煙草巻きをしている。良く売れるから巻いてみてはとすすめてくれたので器具と巻き方を教わり妻と共に巻いてみたが太さを揃えるのに時間がかかった。いつも店を出すのが満映前で十

本入りが良く売れた。一人の兵隊が店の前で立ち止まって買うでもなく見ている。持っている銃は古い三八式歩兵銃だが、弾の入った帯を肩から斜めにしている姿は八路軍だが日本人らしいので、日本人かと聞くと頭を下げて山形だと言って立ち去る後ろ姿を見ながら、山中で匪賊になると言いつて山奥に入つて行った兵隊たちのことを思い出した。タバコ巻が忙しくなると葉煙草も大量に仕入れることになって在満期間の長い上司に相談したところ、危険はあるが満人街に行けば安いし品質が良い。翌日行くことになった。上司の所に集合すると三人になっていた。期待と不安で出発したが治安も良く安心して葉煙草を見ることが出来たが、多くの種類があるので迷つて各店を回った。

街の中央付近で三人の中共軍につかまった。彼等は「食事も出さず食糧も上げるから手伝つてくれないか」と取りかこまれた。「我々は葉煙草を買いに来たのですぐ帰らないと妻子が心配するから駄目だ」と言つた瞬間腕をつかまれた。逆らつても駄目だと思つたので「分かつた手伝うから老人だけは帰してくれ」

と言つたと上司の顔を見てから「あなたは帰りなさい」と言い、上司は後を振り返りながら帰つた。

連れて行かれた所は河を渡つた反対側の原と畑の入り交じつた広い場所だった。各人種が集まっている。将校らしい人の説明では政府軍と戦うので機関銃座を造つてくれとのことだった。兵隊が来て造り方を知っているかと聞いたので「ミンバイ」と言つたとスコップを渡された。早く造つて帰りたいと思つたので急いだ。又兵隊が来て「そんなに急ぐな終われば別の所をやらされるからゆっくりやれ」と言つたのに驚いて顔を見合わせた。昼になり何を食べさせられるか不安もあつたが、高粱と野菜の油炒めを兵隊と一緒に食べたのであるとか満足した。午後に機関銃座をつなぐ堀を掘れと小枝で直線を引いたので直線では駄目で電光形に掘ると説明したが、直線で良いと言つるので掘り始めたらすぐ兵隊が帰つて来て「あなたの言う通りだ」と頭を下げた。

間もなくして飛行機の音がして空を見ると豆つぶほどに一機が飛びさつた。それを見た兵隊たちはそわそ

わし出して、高粱をくれて早く帰れと言うので「どうしてか」と聞いてみた。兵隊は空を見上げて「あれが来たのでは対抗出来ないから逃げるのだ」と後退を始めた。立派に造ったところで一発も撃たず後退とは、私たちには考えられなかった。敗ける戦闘はしない。これが最善の戦術かもしれない。

夜中になって腹痛がおこり下痢で眠れない。畑の中に出された昼食の中毒であることが分かった。菓を飲んで三日間で元気になって働き出した。その日の午後飯岡君の奥さんが来た。いつも仲が良く二人でしか歩かない夫婦が一人で来たので不吉を感じ聞いてみると、「主人が死んだの」と涙を流して話し始めた。緑園地区は開拓団からの避難民が多かった。麻袋を体にまいて避難所に着いた時は骨と皮だけだったので、伝染病で次々と死んでいった。朝起きると隣の人が死んでいくことは毎日だった。病院で手伝っていてパラチフスで死亡したと聞かされた時信じられなかった。弾の一発ぐらいでは死ぬような男ではない。憂快な人だったし、北海道の男だけに熊のような体をしていたが、気

は優しいところがあった。一杯飲むと山の中で出会った時の事を奥さんに見せたかったと、笑う男らしい男だった。関東軍に見放された日本人は悲惨だった。特に屯田兵として奥地に入植させられた開拓団が悲惨きわまりなかった。飯岡君は開拓団を入植させた満拓の一員として、団員を世話して死んで行ったらと手を合わせて冥福を祈った。

数日後孟家屯から煙草工場を造るが参加しないかと誘いがあったので行って見た。年配の方で元秦野で葉煙草改良に関係していたとのことで、煙草に関しては良く知っている。良いうまい煙草が出来ることを確信して、参加して工場の一室に引っ越して来た。巻く女の人を五人入れ共同生活をしながら煙草巻きをする。ことにし、私は葉煙草をきざみそれに先輩が味をつけた。製造が始まって間もなく「うまい」と評判になって来たので、紫煙と名前をつけて店に出した。当時孟家屯は政府軍の管轄下にあつて平穩の毎日が続いたが、九月に入ってから軍隊の動きが多くなり、孟家屯にも政府軍が集結した。三棟あつた上の棟の右端の二階の一

室に機関銃をすえた。下は土囊を積む有刺鉄線を張る陣地構築も夕方に終わった。年取った兵隊が多かったのが不思議だった。

夜になると小銃の音が遠くで聞こえる。中共軍が撃つて来るのだらう。れんが造りなので安心だが玄関窓等は危険なので工場から畳を持って来て二枚ずつ重ね立て掛けた。早く夕食をすませ女たちを押し入れに入れて私だけが見て回った。心配になって来たのか妻が出て来て表を見ようとしているのに驚き押し入れに入るように言った。玄関をたしかめに行くと、銃撃戦がますます激しくなって来て、政府軍の機関銃も応戦して一時間ぐらい接近戦をしたかと思つた時、大きな破裂音と共にれんがの崩れる音と共に銃声が止まった。急に静かになったので、これからどうなるのか言いしれぬ不安を感じた。

一睡もせず一夜を明かして朝玄関から出て見ると、指揮官らしい人がいたので中共軍はどうなりましたかと聞いてみると無言で行ってしまつた。戦闘現場に行つて室の一部が崩れ落ちていてただで死人一人もい

なかつたが兵隊を見て驚いた。洋傘和傘を背負っているのを見て中共軍であることが分かつた。急ぎ家に帰つたが全身寒気がした。その後は平和な生活が続き、煙草工場も多忙をきわめた。

昭和二十一年に入ってから帰国の話が出始め緑園地区は準備を始めている。一番先に帰るらしい。安民地区は二番らしい、そんな話が伝わつて来た。夜、妻と埋葬した子供のことで話し合つたが、帰国の話がある以上一日も早く茶毘にしようとして燃料集めに毎日を費やした。社宅の裏地に穴を掘り古材を並べて準備して、長い棒とスコップを持って荒野の墓標の所に行き、土地の状態が良かったのですぐ掘り出せた。半分水に浸っていたので綿にしみた水分で重かつた。ロープで二か所を縛り棒を通して前を妻に担がせたが重くて上がらないと言いだした。

子供のことだろ力を入れて頑張れよと叫ぶのだが、持ち上がらないので私が箱を持つようにして妻に一番先を担がせた。水は滝のように洋服にかかつたがやつと担ぐことが出来た。重い上に足場が悪いので前に進

むより左右に動くのが多い。その度に箱がふれてますますよろよろが激しくなつて来る。しばらく歩いてゐる内に孟家屯駅の方からソ連兵が来るのが見えた。まだ遠いが足速で追つて来る。何か良い物が入つてゐると思つて追つて来るのだ、妻を目当てに来るのか急がねばならない。「ソ連兵が来るから早く早く」と連呼し続けた。妻も真剣になつて力が出たのか歩き出した。

社宅に着いた時は二人共しばらく座つたままだった。この距離は何千メートルにも感じたし、何時間にも感じ、心身共に疲れきつてしまつた。水をふくんだ綿を取り除き、妻の「火をつけて」の声でマッチをすつた。良く燃えて一時間で終わつた。歯がはえていなかつたが、骨の中から七本も歯があつた。小さな箱の中に入れて社宅に帰つた。これが私たち夫婦の唯一の帰国の大切な持ち物となつた。毎日あちこちで茶毘の煙が多くなり出した。友人の父親を茶毘にした。我が子を焼き友人の父親まで焼いても何とも感じない精神状態はどうだったのか。

人の死は当然のように見、死体を何とも感じない、

このあらゆる気持ちには戦争と言う中で人間らしい精神を失つて来たのだろうか。戦争には付きものの行為なのか、二度と戦争はしたくない。二度とこの精神状態にもなりたくない。平和の尊さをかみしめて生きて行きたいものと祈つて、引揚げの時を待った。

#### 【執筆者の横顔】

阿久津氏は栃木県生まれで、東京都品川に居住している実業家である。

若き日に家業に従事していたが、満州拓植公社の職員に採用されて家族とともに渡満し佳木斯の満拓事務所に勤務していた。

昭和十九年七月に召集となつた。当時の事は不法に越境して侵攻してきたソ連軍に切り込み隊を編成して山深く派遣した中に阿久津氏は縦横の働きをしていた。途中無電使用もなかつたので八月十五日の日本敗戦で終戦になつたことも全然知らず、奥地へと進撃して行つた。名月溝というところで初めて終戦になつたことを知り、切り込み隊はみな悲憤慷慨したのである。

みは一変して家族のおるところに引き揚げへと急いだ。

阿久津氏は佳木斯にもどり家族とともに日本へ引揚げのことで相談ごと各自、自主的行動となった。阿久津氏は孟家屯で子供が肺炎でその苦痛に手当てすることも医薬もなく病没の悲劇にあう。

妻と二人涙を流しながら穴を掘り、周囲に咲くコスモスを手折りたくさん死骸にふりかけて埋めて弔った。

新京（現長春）では同僚仲間と共に日本軍の倉庫から麻糸、タバコ、味のもとなどを馬車に幾台も運搬して満州人の商家に売却し、その資金を同僚家族の生活費に配分していた。

その後、八路軍と中国政府軍と交戦はげしく、阿久津氏らは八路軍に捕らえられ、砲座つくりの使役に引っぱり出されたが、政府軍の軍機飛来したところ、負ける戦争は止めたと言つて八路軍は早々と後退して行った。そのころソ連軍と地方暴民から略奪、暴行、殺傷の限りの悪事にあい、婦人は犯されるといふ地獄化した悲劇に抵抗もできぬままである。

新京はようやく治安がおさまりにかけている中に引揚げの話が伝わってきた。阿久津氏は妻と二人で危険をおかして孟家屯に埋没してある子供を掘りおこしに出かけて泣きながらその死骸を自宅の前庭までかつぎ運んできた。この労苦をあえて実行し、茶毘にふして七本の歯を拾い小箱におさめて、栃木県の自宅に持って供えた。人生に親子の縁の深さ当然ながら感慨無量である。

引揚げ者の労苦は桁はずれである。その桁はずれの労苦を共にした妻は今もなく、生前その労苦にむくいること少なかったことを思い仏前で妻を慰めて語る阿久津氏である。彼は渡辺美智雄元外相と中学の同窓で親しい柔道部の仲間である。

(出)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)